



## 幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する縦断的検討

著者	大内 晶子, 櫻井 茂男
雑誌名	教育心理学研究
巻	56
号	3
ページ	376-388
発行年	2008-09
権利	日本教育心理学会 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである
その他のタイトル	Nonsocial Play, Social Skills, and Problem Behavior in Kindergarten Children : A Longitudinal Study
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/105236">http://hdl.handle.net/2241/105236</a>

# 幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する縦断的検討

大内 晶子\* 櫻井 茂男\*\*

本研究の目的は、2年保育の幼稚園における年少児（4歳児）の非社会的遊び（沈黙行動、ひとり静的行動、ひとり動的行動）に注目し、その変化および社会的スキル・問題行動との関連を男女別に明らかにすることであった。そのため、入園直後（Time 1）とその約半年後（Time 2）に幼児の非社会的遊びの観察を行い、Time 1, Time 2, および卒園直前（Time 3）に彼らの社会的スキル・問題行動について担任教師に評定を求めた。その結果、沈黙行動が Time 1 から Time 2 にかけて減少することが示された。また、社会的スキル・問題行動との関連において、沈黙行動は、男女共に主張スキルの低い子どもに見られた。ひとり静的行動は、Time 2 にその行動が多く見られた場合、女兒は協調スキルが低く不注意・多動傾向にあること、男児は Time 3 における主張スキルの低さを予測することが明らかになった。ひとり動的行動は、行動が見られた時点ではいずれの関連も有意でなかったが、男児は Time 1 のそれがその後の主張スキルの低さを、女兒は Time 2 のそれが Time 3 における外在化した問題行動を予測した。

キーワード：非社会的遊び、社会的スキル、問題行動、幼児

## 問題と目的

幼稚園や保育園には、同年齢くらいの仲間がたくさんいる。子どもたちは、そうした仲間と遊び、時に衝突しながらも、人と関わることの楽しさや難しさ、集団生活のスキル等を学んでいく。一方、そうした集団場面においても、1人ぼつんと仲間から外れて遊んでいる子どももいる。なぜ彼らは1人でいるのか。その行動は後にいかなる影響をもたらすのか。これらの疑問を明らかにする一つの観点として、非社会的遊び（nonsocial play）という概念が注目されてきた。

非社会的遊びとは、周囲に遊び可能な相手がいる状況において、社会的相互作用の見られない遊び（Coplan, 2000）と定義される。Coplan ら（例えば、Coplan, 2000 ; Coplan, Rubin, Fox, Calkins, & Stewart, 1994）は、この非社会的遊びが、行動、感情、動機の質によって、沈黙行動（reticent behavior）、ひとり静的行動（solitary-passive behavior）、ひとり動的行動（solitary-active behavior）という3つの形態に分けられることを示してきた。以下に3つの行動の特徴を述べる。

沈黙行動は、何もしていない行動（unoccupied behav-

ior）と傍観者の行動（onlooker behavior）からなる。他者の遊びをただ見ていたり、目的もなく部屋を歩き回ったりする行動などがこれに含まれる。内気さと正の関連があること（例えば、Coplan, 2000 ; Coplan et al., 1994 ; Gottman, 1977 ; Henderson, Marshall, Fox, & Rubin, 2004）、対人不安のような内面的な不適応の問題と関連があること（Coplan, 2000 ; Rubin & Asendorpf, 1993）が指摘されてきた。また、Asendorpf (1990) は、最初こそ見知らぬ人に対する抑制（内気さ）に起因した行動であるが、次第にクラスメイトからの無視や拒否と関連が強くなることを示唆している。

ひとり静的行動は、ひとり構成的遊び（solitary-constructive play）とひとり探索的遊び（solitary-exploratory play）からなる。ブロックを組み立てたり、絵を描いたり、虫を観察したりする行動がこれにあてはまる。この行動が多く見られた時点では、ネガティブな感情や不安の表出が見られないことが報告されている（Coplan et al., 1994 ; Rubin, 1982）。そのことから、非社会的ではあるが、感情的には良く統制された好ましい遊びの形態であると考えられる傾向にある。しかし、小学校4、5年生になってから、内在化した問題（自己価値の低さ、孤独感、抑うつ）との関連を示すようになることも報告されている（Rubin, Hymel, & Mills, 1989）。

ひとり動的行動は、ひとり機能的遊び（solitary-functional play）とひとり劇遊び（solitary-dramatic play）からなる。繰り返しの感覚運動や1人での見立て遊びなどがこれにあてはまる。衝動的で感情統制が困難で

\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科  
〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1  
aohuchi@human.tsukuba.ac.jp

\*\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系  
〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1  
ssakurai@human.tsukuba.ac.jp

あること (Coplan, Gavinski-Molina, Lagacé-Séguin, & Wichmann, 2001), 外在化した問題行動 (特に攻撃) や仲間はずれと関連があること (Coplan et al., 1994; Rubin, 1982) が指摘されている。つまり、衝動的で感情がうまく統制できないという目立ったマイナスの特徴を持ち (Rubin, 1982), 仲間からの拒否を導くようなひとり動的行動を起こすと考えられている。

以上のように、非社会的遊びの研究は、1人での子どもの行動をより詳細に捉えることで、彼らがいかなる特徴を持ち、その行動がどのような認知的、社会的意味を持つのかについて、多くの知見をもたらしてきた。よって、集団内で1人で過ごすことの多い子どもについて考えるとき、非社会的遊びの観点から子どもの行動を捉えることは有効であると考えられる。しかし、その一方で、研究間で一貫しない結果や、十分に検討されていない点も存在する。その中から本研究では、以下の2点を問題として挙げる。

第1に、調査を行う時期に関する問題である。Fabes, Hanish, Martin, & Eisenberg (2002) は、ネガティブな感情気質を持つ子どもは、3ヶ月間に渡って1人での時間が増加したことを報告している。確かに、幼児期は発達的变化も大きく、入園時から1人でのことが多かった子どももいれば、途中から孤立していく子どもや、入園当初のみ孤立していた子どももいるであろう。しかし、非社会的遊びに関する研究において、非社会的遊びの観察を縦断的に行った研究はわずかであり (Rubin et al., 1989; Spinrad, Eisenberg, Harris, Hanish, Fabes, Kupanoff, Ringwald, & Holmes, 2004), その中でも、約半年という短い間隔で観察を行ったのは、Spinrad et al. (2004) であった。この研究では、Time 1 (秋学期) から Time 2 (春学期) で非社会的遊びの増加が見られた。また、Time 1 で見られた沈黙行動と不安との関連が Time 2 では有意でないなど、時期によって非社会的遊びとその他の変数との関連が異なることが示された。確かに、実際の幼稚園生活を考えてみても、誰にとっても新しい環境と、仲間関係が形成された後の環境では、1人でのことの意味が異なる可能性が考えられる。よって、本研究では、2年保育の幼稚園の年少児を対象とし、入園直後 (5月-6月) とその約半年後 (10月-11月) の2回、非社会的遊びの観察を行うことにする。時期については、安定した友だち関係は、6月から7月中旬にかけて形成され、親友関係は、少なくとも10月まで関係が持続するという謝 (1999) の知見を参考に、安定した友だち関係が形成される前と後の時期を設定した。

第2に、非社会的遊びと社会的適応の関連における性差についてである。Coplan et al. (2001) は、非社会的遊びと社会的適応 (行動問題、社会的コンピテンス、学力) との関連を検討し、ひとり静的行動とひとり動的行動において性差の存在することを明らかにした。ひとり静的行動の多い子どものうち、男児は社会的コンピテンスと学力がそれぞれ低く、女児は学力が高いことが示された。また、ひとり動的行動の見られた女児は、それが全く見られなかった女児と比べて外在化した問題行動が多かったが、男児では有意な差が見られなかった。この結果に関し、Coplan らは、女児は社会的関心の低さゆえ、男児は内気さゆえにひとり静的行動を多く見せる可能性があること、男児のひとり静的行動、女児のひとり動的行動は、教師からより不適応的な評価を受ける可能性があることなどを示唆している。その後の研究も含め、これらの性差を十分に説明する一貫した知見は存在していないものの、行動あるいは行動に対する周囲の評価の背景には、男女で異なる心理メカニズムの存在する可能性が考えられる。また、乳幼児期において、子どもは男女別に遊ぶようになること、それぞれ異なる遊びの様式を持っていることが報告されてきている (Golombok & Fivush, 1994)。このことから、非社会的遊びの出現率においても性差の見られる可能性が考えられる。

本研究では、上記の2点の課題を踏まえ、1人で遊ぶことが多い子どもの遊びの形態 (非社会的遊び) に注目し、2時点間のそれらの変化を男女別に明らかにすることを第1の目的とする。

さらに、第2の目的として、非社会的遊びと子どもの社会的スキル、問題行動との関連を検討する。社会的スキルが孤立児において不足していることはこれまでも指摘されているが (佐藤・佐藤・高山, 1993), 非社会的遊びの分類において、それとの関連を検討した研究は見あたらない。社会的スキルの定義は、これまで様々な研究者によってなされており、例えば「対人関係を円滑にはこぶために役立つ技能」であり、具体的な行動であるとされる (菊池, 1988)。またその行動は、学習されるものであることが前提にある (庄司, 1991)。これまでの非社会的遊び研究では、気質や社会的適応との関連が主に検討されてきたが、これらは直接的な介入によって変容させることを前提としていないと考えられる。学習されることが前提にある社会的スキルと非社会的遊びとの間に関連があることを示すことができれば、孤立しがちな子どもの集団との関わりを増やしたい際、彼らに不足している社会的スキルを学習

させることで一つの介入が可能になると考える。もちろん、非社会的遊びが社会的不適応を示す指標であるかを考える上で、問題行動との関連を検討することは不可欠であろう。しかし、非社会的遊びの多い子どもの中には、目立った問題行動はなくとも社会的スキルは低い子どものいることが考えられ、そのことは、仲間関係の形成のしにくさやその後の適応に影響すると予想される。したがって、問題行動だけでなく社会的スキルとの関連を検討することにより、非社会的遊びの研究が、様々な子どもの社会的適応を予測する上で意義のあるものになることが期待される。なお、社会的スキル、問題行動については、入園直後とその約半年後の2回に加え、入園から約2年後の卒園直前(2月下旬)にも調査を行う。それにより、非社会的遊びを多く見せる子どもが、その時どのような社会的スキルが不足しているか、ということだけでなく、その後の社会的スキルの獲得や問題行動の発現といかなる関連があるのかについて明らかにできると考える。

よって本研究では、幼稚園の年少児を対象とし、はじめに、彼らの非社会的遊びが入園してから約半年でどのように変化するのかについて男女別に検討する。次に、入園直後とその半年後の非社会的遊びと、同時期および卒園直前の社会的スキル・問題行動との間の関連について検討する。

## 方 法

### 調査対象

茨城県内の2つの公立幼稚園に在籍する年少児(4歳児クラス)85名(男児50名、女児35名;観察開始時平均月齢55.94ヶ月、SD3.98ヶ月)とクラスの担任教師6名<sup>1</sup>。両幼稚園は、いずれも2年保育を実施しており、4歳児(年少児)クラスが2クラス、5歳児(年長児)クラスが2クラスで構成されていた。調査開始時に本研究で対象としたのは、4歳児クラスの合計4クラスであった。なお、調査開始当初は合計95名を対象としていたが、転園7名、休園1名、観察時間不足1名、担任教師からの無回答1名を除いて、上述の85名を本研究全体の調査対象とした<sup>2</sup>。また、いずれの幼稚園も、年長児と年少児

は一緒に遊べる環境にあった。

### 調査時期

遊び行動の観察は、2004年5月中旬～6月中旬(以下、Time 1と記す)、2004年10月中旬～11月中旬(以下、Time 2と記す)のそれぞれ約1ヶ月間実施した。実際観察を行った日数は、Time 1が19日、Time 2が18日であった。教師に対する質問紙調査は、2004年6月下旬(以下、Time 1と記す)、2004年11月中旬(以下、Time 2と記す)、2006年2月下旬(以下、Time 3と記す)の3回実施した。

### 調査内容と実施手続き

#### 1. 子どもの遊び行動

自由遊び場面の子どもの行動をビデオカメラで撮影し、遊び観察尺度(Play Observation Scale: POS)(Rubin, 1989)を筆者が改作したものを用いて評価した。

**遊び観察尺度の構成** 本研究では、その目的から、既存のPOSに修正を施した。具体的には、機能的遊びから、一輪車に乗る練習、竹馬で歩く練習など今までできなかったことができるようになることを目的とした行動を除外した。これらの活動は、必ずしも仲間と一緒に取り組む必要はなく、子どもによっては1人で取り組むことを好む場合もあるだろう。仲間との関係性などにかかわらず、自ら積極的に選択するひとり遊びの形態であると考え、本研究ではひとり機能的遊びから除外した。

沈黙行動、ひとり静的行動、ひとり動的行動の定義は次の通りである。「沈黙行動」は、他の子どもの遊びを見ているだけの行動(傍観者の行動)と、遊んでいるとはいえず、何かをぼうっと見ているような行動(何もしていない行動)を指す。「ひとり静的行動」は、何かを構成したり、作り出したりする目的のために、物体を操作する行動(ひとり構成的遊び)と、ある特定の物質的な特性についての情報を得るために、物体に焦点を当てて調べる行動(ひとり探索的遊び)を指す。「ひとり動的行動」とは、単に自分が生み出す肉体の感覚を楽しむために行われ、単純で繰り返しのある運動(ひとり機能的遊び)と、誰か他の人物の役割を担ったり、マネごっこをしたり、動かないものに命を与えたりする遊び(ひとり劇遊び)を指す。

**調査手続き** 実際の観察を始める前に、子どもを観察者に慣れさせること、観察者が子どもの名前と顔を一致させることを目的として、対象となる子どもの写真を一人一人デジタルカメラで撮影した。観察は、午前の自由遊びの時間(1～2時間)に行った。遊びの場は、雨天時は屋内に限られたが、それ以外の日は、屋内、屋外の好きな場所で遊ぶことが可能であった。そ

<sup>1</sup> Time 1, Time 2の調査で回答を依頼したのは、各クラスの担任教師4名であったが、Time 3の調査においては、学年が変わり担任の変更があったため、新たに2名の担任に協力を依頼することになった。よって、Time 1～Time 3まで一貫して回答した教師は2名であった。

<sup>2</sup> 発達障害などの診断を受けている子どもは、教師からの聞き取りによって最初に対象から除外した。

れぞれの子どもは1日に5分間ずつ、異なる3日間に分けて合計15分間記録された。その日に観察する子どもは、ランダムに選出した。1回のビデオの撮影は、筆者と1名の協力者（全観察で合計8名の協力者）によって、最大で2台のデジタルビデオカメラを使用して行われた。撮影においては、本人に自分が撮影されていると気づかれない程度に距離をおくことに留意した。

**得点の算出** 撮影されたビデオは、10秒を1インターバルとするタイム・サンプリング法により、改作された遊び観察尺度(POS)を用いて評定された。10秒間(1インターバル)に見られた代表的な行動について、その行動が属するカテゴリーを1つ選び、これを1得点とした。5分間のデータのうち、最初の30秒間は、子どものその時の状況を把握するために利用し、データとしては用いなかった。よって、1人につき合計13分30秒(81インターバル)を符号化し、カテゴリーごとに合計得点を算出した。その後、合計得点を81で割ることで、観察時間中にどのくらいの割合でその行動が見られたのかについて出現率を算出した。よって、この出現率は、0.00-1.00の範囲で表される。

**行動評定の信頼性** 本研究の行動の評定はすべて筆者1人で行った。その信頼性を検討するために、全体の約12.00%のインターバルについて4名の協力者に評定を求めた。筆者の評定との一致度をコーエンのカッパー係数により算出した結果、 $\kappa = .65$ であった。このことから、本研究の行動尺度には信頼性のあることが確認された。

## 2. 子どもの社会的スキル・問題行動

子どもの社会的スキルについて幼稚園教師に対し質問紙調査を実施した。尺度は金山・磯部・佐藤・佐藤(2002)によって作成された幼児用社会的スキル尺度を使用した。これは、社会的スキルを測定する16項目、問題行動を測定する11項目からなる。社会的スキル尺度は、「主張スキル(例：友だちをいろいろな活動に誘う)」を測定する8項目、「協調スキル(例：園での活動をきちんと行う)」を測定する5項目、「自己統制スキル(例：仲間からいやなことを言われても、適切に対応する)」を測定する3項目の合わせて3つの下位尺度から構成される。一方、問題行動尺度は、「不注意・多動(例：不注意である)」を測定する4項目、「攻撃(例：人や物に攻撃的である)」を測定する4項目、「引っ込み思案(例：他の子どもたちと一緒にいるとき不安そうである)」を測定する3項目の合わせて3つの下位尺度から構成される。過去1ヶ月の子どもたちの行動について思い出し、各項目に示されている行動がどの程度見られたかについて、「まったくみられなかった」(1点)―「非常によくみられた」(5点)までの5段階評定で回答を求めた。

担任教師には自由な時間に回答してもらい、1-2週間後に回収した。

## 結果と考察

### 非社会的遊びの変化

#### 1. 記述統計量

Time 1とTime 2における沈黙行動、ひとり静的行動、ひとり動的行動の出現率の平均、標準偏差、範囲をTable 1に示す。また、男女の平均の差、Time 1とTime 2の平均の差(対応あり)を見るためにそれぞれ $t$ 検定を行った。

**沈黙行動** 友だちが遊んでいるのを傍でじっと見ている行動(傍観者の行動)、何をするのでもなくうろうろ歩き回っている行動(何もしていない行動)が、ここに分類された。Time 1、Time 2ともに男女間に平均の差は見られなかった。また、全体において、Time 1の平均はTime 2のそれに比べて有意に高かった( $t(90) = 2.18, p < .05$ )。

**ひとり静的行動** 1人でブロックを組み立てたり、粘土や折り紙で何かを製作したり(ひとり構成的行動)、1人で虫やウサギを観察したりする行動(ひとり探索的行動)がここに分類された。Time 1、Time 2ともに男女間に平均の差は見られなかった。また、Time 1と

**Table 1** 非社会的遊びの出現率の平均( $M$ )、標準偏差( $SD$ )、および範囲

	Time	全体( $n = 85$ )			男児( $n = 50$ )			女児( $n = 35$ )		
		$M$	$SD$	範囲	$M$	$SD$	範囲	$M$	$SD$	範囲
沈黙行動	1	.19	.13	.01 -.65	.20	.13	.01 -.59	.19	.14	.01 -.65
	2	.16	.08	.00 -.43	.17	.09	.05 -.43	.16	.08	.00 -.32
ひとり静的行動	1	.09	.11	.00 -.63	.09	.12	.00 -.63	.08	.11	.00 -.36
	2	.11	.12	.00 -.51	.11	.11	.00 -.47	.11	.13	.00 -.51
ひとり動的行動	1	.08	.09	.00 -.51	.11	.10	.00 -.51	.05	.06	.00 -.21
	2	.07	.09	.00 -.43	.10	.10	.00 -.43	.04	.06	.00 -.25

Note. Time 1は5-6月、Time 2は10-11月の観察時期を示す。

Time 2 の平均に有意な差は見られなかった。

**ひとり動的行動** 1人で滑り台をすべる、人工の山に登る、三輪車に乗る、バケツに水をくむ行動(以上、ひとり機能的行動)、正義のヒーローになったふりをして1人で声をあげて走り回る行動(ひとり劇遊び)などがここに分類された。Time 1, Time 2ともに、男児の平均は女児のそれに比べて有意に高かった(順に、 $t(79.68)=3.26, p<.01$ ;  $t(78.94)=3.13, p<.01$ )。また、Time 1とTime 2の平均の間に有意な差は見られなかった。

## 2. 非社会的遊び間の関連

Time 1とTime 2のそれぞれにおける3つの非社会的遊び間の関連、およびTime 1とTime 2の間での3つの非社会的遊びの関連を見るために、男女別に相関係数を算出した。その結果、いずれにおいても有意な関連は見られなかった。

## 3. 考察

以上の結果より、非社会的遊びの出現率の男女差、Time 1からTime 2への非社会的遊びの出現率の変化、非社会的遊び間の関連について明らかになった。

第1に、男児は女児と比べてひとり動的行動をより多く見せる傾向にあることが示された。実際、男児に身体的遊びが多く見られることは、これまで複数の研究者によって報告されている(例えば、Golombok & Fivush, 1994; 相良, 2005)。

第2に、 $t$ 検定の結果より、全体の傾向として、沈黙行動はTime 1からTime 2にかけて減少することが明らかになった。すなわち、沈黙行動は、入園当初のまだ慣れない環境で多く見られる行動であると言えるであろう。しかしその一方で、ひとり静的行動とひとり動的行動は半年間で有意な減少は見られなかった。これらの結果は、沈黙行動とひとり静的行動に半年間で増加が見られたSpinrad et al. (2004)の知見とは異なるが、彼らの研究では対象児の年齢も34-76ヶ月と幅が大きく、本研究のように学年と時期を絞った研究ではないため、単純に比較はできないと考える。

第3に、Time 1, Time 2のいずれにおいても、3つの非社会的遊び、すなわち沈黙行動、ひとり静的行動、ひとり動的行動の間に有意な関連は見られなかった。これは、Coplan et al. (1994)などと一致した結果であり、非社会的遊びが多い子どもであっても、各個人によってその行動の形態に異なる傾向があることを示す結果であると言えよう。また、Time 1とTime 2の行動の間にも有意な関連が見られなかったことから、非社会的遊び、特にTime間で平均差が見られなかったひとり静的行動とひとり動的行動においては、入園

してから半年間にその行動が減少した者もいれば増加した者もいることが考えられる。

以上のように、3つの非社会的遊びがそれぞれ異なる現れ方、変化の仕方をしたことは、集団場面において1人で遊んでいる際の行動が、一元的にはなく、その行動、感情、動機などの内容によって区別して捉えられるべきであるとする、これまでの主張を支持する結果であると言える。さらに、出現率には男女差のあることも示された。また、非社会的遊びの出現率の変化について、入園してから半年間の特徴が明らかになった。これらの知見は、観察の時期、性差に注目することで得られた新たな知見であると考ええる。

## 非社会的遊びと社会的スキル・問題行動との関連

### 1. 社会的スキル・問題行動尺度の検討

社会的スキル・問題行動下位尺度の平均、標準偏差をTable 2に示す。

**信頼性の検討** 社会的スキル・問題行動の下位尺度の $\alpha$ 係数は、Time 1, Time 2, Time 3のそれぞれにおいて、主張スキルが.91, .93, .84, 協調スキルが.77, .95, .89, 不注意・多動が.91, .94, .89, 攻撃が.78, .86, .75, 引っ込み思案が.72, .76, .69であった。自己統制スキルは、Time 1の「10. 批判されても、気分を害さないで気持ちよくそれを受ける」という項目が、他の2項目と負の相関を示した。さらにこの項目に関して、1名の教師から「批判されたのに、それを気持ちよく受ける子どもはいないのではないか」という理由で回答が困難だったという指摘を受けた。よって自己統制スキル下位尺度は、分析から除外した。

**男女差の検討** 社会的スキル・問題行動下位尺度における男女の平均の差を見るために、 $t$ 検定を行った。その結果、社会的スキルでは男女の有意な差は見られなかった。問題行動では、引っ込み思案が、Time 1, Time 3において、男児の平均より女児のそれの方が有意に高かった(順に、 $t(83)=3.68, p<.01$ ;  $t(50.84)=2.34, p<.05$ )。

また、クラス間の平均の差を検討したところ、Time 1の引っ込み思案以外すべての下位尺度において、有意な差が見られた。よって本研究では、各得点をクラス内で標準化した上で使用することとした。

### 2. Time 1の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動との関連

Time 1の非社会的遊びとTime 1~Time 3の社会的スキル・問題行動との関連を見るため、男女別に相関係数を算出した(Table 3)。なお、非社会的遊びの得

**Table 2** 社会的スキル・問題行動の平均(*M*)と標準偏差(*SD*)

		全体 ( <i>n</i> = 85)		男児 ( <i>n</i> = 50)		女児 ( <i>n</i> = 35)	
	Time	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
社会的スキル							
主張スキル	1	3.07	0.79	3.08	0.87	3.05	0.68
	2	3.22	0.84	3.28	0.91	3.14	0.74
	3	3.50	0.65	3.53	0.75	3.47	0.50
協調スキル	1	3.12	0.82	3.10	0.89	3.15	0.72
	2	3.66	1.03	3.53	1.11	3.85	0.88
	3	4.59	0.55	4.51	0.61	4.69	0.44
問題行動							
不注意・多動	1	2.46	1.09	2.60	1.10	2.28	1.06
	2	2.19	1.12	2.35	1.21	1.97	0.95
	3	1.44	0.61	1.52	0.59	1.31	0.62
攻撃	1	2.15	0.76	2.26	0.77	1.99	0.73
	2	2.10	0.79	2.22	0.83	1.94	0.70
	3	1.55	0.61	1.53	0.63	1.59	0.60
引っ込み思案	1	1.73	0.62	1.53	0.49	2.00	0.69
	2	1.57	0.56	1.55	0.57	1.61	0.56
	3	1.18	0.36	1.10	0.26	1.30	0.44

Note. Time 1 は年少児 6 月下旬, Time 2 は年少児 11 月中旬, Time 3 は年長児 2 月下旬の調査時期を示す。

**Table 3** Time 1 の非社会的遊びと Time 1～Time 3 の社会的スキル・問題行動との相関係数

		男児 (n= 50)			女児 (n= 35)		
	Time	沈黙行動	ひとり 静的行動	ひとり 動的行動	沈黙行動	ひとり 静的行動	ひとり 動的行動
社会的スキル							
主張スキル	1	-.28*	.06	-.26	-.46**	.11	.12
	2	-.31*	-.09	-.34*	-.28	.03	-.03
	3	-.17	-.06	-.32*	-.20	.02	-.13
協調スキル	1	-.17	.00	-.21	.09	-.11	-.20
	2	-.17	.17	-.24	.27	-.31	-.18
	3	-.19	.14	-.27	.32	-.19	-.17
問題行動							
不注意・多動	1	.09	-.05	.04	-.33	.05	.21
	2	.04	-.14	.18	-.34*	.28	.16
	3	-.08	-.06	.10	-.22	.10	.22
攻撃	1	.00	-.07	-.02	-.33	.02	.10
	2	-.01	-.10	.08	-.35*	.21	.05
	3	-.08	-.18	.21	-.28	.13	-.02
引っ込み思案	1	.04	-.12	-.10	.09	-.01	-.04
	2	.10	-.12	-.10	.34*	-.31	.10
	3	.11	-.01	.18	-.14	-.14	.26

Note. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ .

Time 1 は 5 - 6 月, Time 2 は 10 - 11 月, Time 3 は年長児 2 月を示す。

点には分布に偏りが見られたため、対数変換を施して使用した（以下の分析においても同様である）。ここでは、Time 1 における変数どうしの関連についての結果のみを記述する。男児において、沈黙行動は主張スキルとの間に負の相関 ( $r = -.28, p < .05$ ) が見られた。女児においても、男児と同様、沈黙行動と主張スキルとの間に負の相関 ( $r = -.46, p < .01$ ) が見られた。

### 3. Time 2 の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動との関連

Time 2 の非社会的遊びと Time 2～Time 3 の社会的スキル・問題行動との関連を見るため、男女別に相関係数を算出した (Table 4)。ここでは、Time 2 における変数どうしの関連についての結果のみを記述する。男児において、沈黙行動は主張スキルとの間に負の相

**Table 4** Time 2 の非社会的遊びと Time 2, Time 3 の社会的スキル・問題行動との相関係数

		男児 (n= 50)			女児 (n= 35)		
	Time	沈黙行動	ひとり 静的行動	ひとり 動的行動	沈黙行動	ひとり 静的行動	ひとり 動的行動
社会的スキル							
主張スキル	2	-.34*	-.16	-.19	-.37*	-.27	-.03
	3	-.17	-.31*	-.10	-.06	-.14	.19
協調スキル	2	-.15	-.19	.16	.17	-.36*	-.32
	3	.00	-.07	.01	-.01	-.18	-.32
問題行動							
不注意・多動	2	-.04	.11	-.01	-.21	.35*	.33
	3	-.03	-.12	-.10	-.16	.26	.40*
攻撃	2	-.15	.11	-.15	-.25	.10	.32
	3	-.20	-.15	-.17	.11	.15	.43**
引っ込み思案	2	.08	.22	.12	-.02	.19	-.03
	3	.02	.08	.07	-.22	.16	-.09

Note. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ .

Time 2 は 10-11 月, Time 3 は年長児 2 月を示す。

関 ( $r = -.34, p < .05$ ) が見られた。女児においては, 沈黙行動は主張スキルとの間に負の相関 ( $r = -.37, p < .05$ ) が, ひとり静的行動は協調スキルとの間に負の相関 ( $r = -.36, p < .05$ ) が, 不注意・多動との間に正の相関 ( $r = .35, p < .05$ ) が見られた。

#### 4. Time 1 の非社会的遊びから Time 2, Time 3 における社会的スキル・問題行動の予測

Time 1 の 3 つの非社会的遊びを説明変数, Time 2, Time 3 の社会的スキル・問題行動をそれぞれ目的変数とする重回帰分析 (強制投入法) を行った (Table 5)。そ

の結果, 男児において, 沈黙行動から Time 2 の主張スキルに負のパス ( $\beta = -.31, p < .05$ ) が, ひとり動的行動から Time 2, Time 3 の主張スキルにそれぞれ負のパス (順に,  $\beta = -.32, p < .05$ ;  $\beta = -.32, p < .05^a$ ) が見られた。女児においては, いずれの非社会的遊びからも有意なパスは見られなかった。

#### 5. Time 2 の非社会的遊びから Time 3 における社会的スキル・問題行動の予測

Time 2 の 3 つの非社会的遊びを説明変数, Time 3 の社会的スキル・問題行動をそれぞれ目的変数とする

**Table 5** Time 1 の非社会的遊びを説明変数, Time 2, Time 3 の社会的スキル・問題行動を目的変数とした重回帰分析の結果

Time 1 の非社会的遊び(説明変数)									
		男児 (n= 50)				女児 (n= 35)			
目的変数	Time	沈黙行動	ひとり 静的行動	ひとり 動的行動	調整済み <i>R</i> <sup>2</sup>	沈黙行動	ひとり 静的行動	ひとり 動的行動	調整済み <i>R</i> <sup>2</sup>
社会的スキル									
主張スキル	2	-.31*	-.16	-.32*	.17**	-.29	-.03	-.06	-.01
	3	-.16	-.11	-.32*	.08†	-.22	-.04	-.15	-.03
協調スキル	2	-.12	.14	-.21	.04	.20	-.30	-.20	.10†
	3	-.14	.08	-.24	.02	.28	-.16	-.16	.05
問題行動									
不注意・多動	2	.01	-.12	.17	-.01	-.28	.25	.17	.11†
	3	-.10	-.07	.10	-.04	-.19	.09	.21	.01
攻撃	2	-.03	-.10	.07	-.05	-.32	.16	.04	.06
	3	-.13	-.18	.21	.03	-.27	.08	-.03	.00
引っ込み思案	2	.09	-.11	-.12	-.03	.30	-.24	.10	.11†
	3	.10	.02	.17	-.02	-.15	-.14	.23	.01

Note. 数値は標準偏回帰係数。

† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 。

Time 1 は 5-6 月, Time 2 は 10-11 月, Time 3 は年長児 2 月を示す。



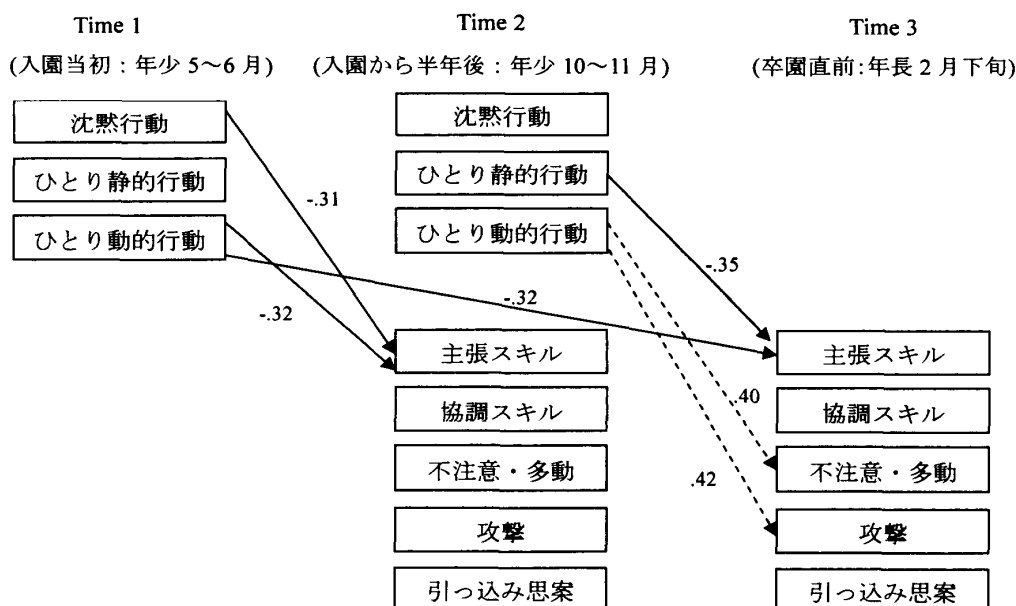
**Table 6** Time 2 の非社会的遊びを説明変数、Time 3 の社会的スキル・問題行動を目的変数とした重回帰分析の結果

Time 2 の非社会的遊び(説明変数)									
		男児 (n= 50)				女児 (n= 35)			
目的変数	Time	沈黙行動	ひとり 静的行動	ひとり 動的行動	調整済み R <sup>2</sup>	沈黙行動	ひとり 静的行動	ひとり 動的行動	調整済み R <sup>2</sup>
社会的スキル									
主張スキル	3	-.25	-.35*	-.10	.11*	-.09	-.16	.21	-.02
協調スキル	3	-.01	-.07	.01	-.08	.01	-.17	-.31	.03
問題行動									
不注意・多動	3	-.06	-.13	-.10	-.04	-.15	.21	.40*	.17*
攻撃	3	-.24	-.19	-.18	.05	.10	.14	.42*	.14†
引っ込み思案	3	.05	.09	.07	-.05	-.20	.14	-.08	-.02

Note. 数値は標準偏回帰係数。

† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 。

Time 2 は 10-11 月の、Time 3 は年長児 2 月の調査時期を示す。

**Figure 1** 非社会的遊びからその後の主張スキル・問題行動の予測 (重回帰分析)

Note. 数値は標準偏回帰係数。調整済み  $R^2$  は Table 6 を参照。

実線は男児の、破線は女児の結果を表わす。

重回帰分析 (強制投入法) を行った (Table 6)。その結果、男児において、ひとり静的行動から Time 3 の主張スキルに負のパス ( $\beta = -.35, p < .05$ ) が見られた。女児においては、ひとり動的行動から Time 3 の不注意・多動と攻撃にそれぞれ正のパス (順に、 $\beta = .40, p < .05$ ;  $\beta = .42, p < .05^4$ ) が見られた。

以上、4、5 の重回帰分析の結果をパス図として

Figure 1 に示す。

## 6. 考察

以上の結果より、時期、性別による非社会的遊びと社会的スキル・問題行動との異なる関連が明らかになった。そこで、入園直後の時期とその半年後に非社会的遊びを多く見せる子どもが、社会的スキル・問題行動においてそれぞれいかなる特徴を持つのかについて男女別に論じる。

男児において、3 つの非社会的遊びは、いずれも主張スキルとのみ有意な関連を示した。中台・金山・前

<sup>3,4</sup> 調整済み  $R^2$  は、10%水準で有意傾向であったが、標準偏回帰係数は他の有意なパスと同程度の値であったため、本研究では有意なパスとして考察する。

田(2002)は、主張スキルの高い子どもは同性の仲間からの肯定的指名を受けることを示している。また、吉村(2001)は、男児のクラス内地位が高い群でリーダーシップが高かったことを明らかにしている。いずれの先行研究の知見も5歳児(年長児)において見られた結果であり、4歳児を対象に観察した本研究の結果を十分に支持するとは言えないものの、男児の仲間関係において、主張スキルが大きな役割を果たし、それを持たない子どもは、仲間に入れず孤立する可能性があると考えられる。

男児の沈黙行動に関し、Time 1において、沈黙行動を多く見せた子どもは主張スキルが低かった。Time 2の沈黙行動においても同様の傾向が見られた。ただし、Time 1の沈黙行動はTime 2の主張スキルの低さを予測したもの、Time 3での低さは予測しなかった。また、Time 2の沈黙行動も、Time 3ではいずれのスキル・問題行動へも有意なパスが見られなかった。沈黙行動は、社会的接近欲求と回避欲求の両方が高い子どもに見られる行動であるという報告もあるように(Coplan, Prakash, O'Neil, & Armer, 2004)、仲間に関心があるからこそ、その様子を見ているのであろう。沈黙行動において全体的な出現率の低下が見られたことから、少なくとも入園から半年の間に見られる場合は、長期的な社会的不適応の心配をする必要はないのかもしれない。

一方、男児のひとり静的行動に関し、Time 2においてその行動が多かった子どもは、Time 3において主張スキルが低かった。この結果のみから、仲間関係が安定した時期(Time 2)に見られる男児のひとり静的行動が、ただちに不適応的な指標であると言うことはできない。ただし、幼児期のひとり静的行動は、小学4、5年生になってから、内在化した問題との関連を示すようになるとの報告(Rubin et al., 1989)も存在する。よって、彼らの遊びの傾向がその後も変わらないのであれば、主張スキルの低さをきっかけに、就学後、仲間関係に困難を生じる可能性が推測される。また、男児のひとり動的行動に関しても、Time 1でその行動を多く見せた子どもは、その時点ではスキル・問題行動ともに有意な関連が見られなかったものの、その後のTime 2、Time 3において主張スキルが低い傾向にあった。これらの結果から、入園直後のひとり動的行動、仲間関係が安定した時期のひとり静的行動の多さが、その後の園生活における主張スキルの低さを予測する可能性が考えられる。また、先述したように、主張スキルが男児の仲間関係において重要であると考え

るならば、その後の仲間関係への影響も考えられよう。

女児では、Time 1において沈黙行動の多く見られる子どもは、主張スキルの低いことが示された。Time 2でも同様の傾向が見られた。しかし、いずれもその後の主張スキルの低さは予測しなかった。これらは、男児の沈黙行動において見られた結果とほぼ同様である。よって、男児と同様、沈黙行動の多さはその時点での主張スキルの低さを示すが、少なくともこの2つの時期において見られる場合は、長期的な社会的不適応を心配する必要はないのかもしれない。

一方、女児のひとり静的行動に関し、Time 2においてその行動を多く見せる子どもは、協調スキルが低く不注意・多動の高位が明らかになった。すなわち、入園して半年も経つと、仲間と協調して遊ぶことの難しい女児において、ひとり静的行動の多く見られる可能性が示唆された。この結果は、女児において、周囲と協調し合う能力を持つことが、仲間関係を築く上で重要な役割を果たすことを示すものであると考える。実際、集団内での従順さや他者への配慮などに関わる協調性は、女性に対する役割規範の中核をなすものといわれており、幼児期においても、女児は男児に比して従順な行動を著しく発達させることが確認されている(柏木, 1997)。また、司馬(1997)は、多動などの表立った問題行動は起こさないが、集中力がない不注意優勢型の注意欠陥・多動性障害(すなわち注意欠陥障害: ADD)を「のび太型」と命名している。のび太型の子どもは、他の子を気にせず絵を描いて遊んでいたり、あれもこれも面白そうとあちこちに気を取られて結局何もできず、どれも中途半端にしかやらなかったり、1人でぼつんとして他の子どもと上手く遊べなかったりする子どもであるという。この注意欠陥障害は女児に多く見られることが報告されている(Munden & Arcelus, 1999 市川・佐藤訳 2000)。本研究では、不注意と多動を一つの尺度で測定していること、この尺度では障害であるかどうかの判断はできないこと、その後の問題行動との関連は見られなかったことから、彼女らが果たしてどの程度この概念にあてはまるかは分からない。しかし、協調性の低さ、絵を描いたり、周りの物体を探索したりするひとり静的行動の行動特徴との一致を考えると、静かにおとなしく遊んでいるイメージのあるひとり静的行動が、協調性の低さ、不注意・多動の高さとの間に関連が見られたことは説明がつくだろう。

また、Time 2においてひとり動的行動が多く見られた女児は、その時点ではいずれのスキル・問題行動とも関連が見られなかったものの、卒園直前には、不注

意・多動、攻撃の高い傾向が見られた。男児では、Time 1 のひとり動的行動がその後の主張スキルの低さを予測していたが、女児では、より対人的にネガティブな意味を持つであろう外在化した問題行動への影響を示す結果となった。女児のひとり動的行動は男児よりも出現率が低かったことから、女児においてその行動は目立ちやすく、仲間から拒否される可能性もあるため(Rubin, 1982)、その後の問題行動の多さに影響しているのではないだろうか。本研究では、先行研究と異なり、男女共に、ひとり動的行動が見られた時点では社会的スキル・問題行動とのネガティブな関連は見られなかった。しかし、その後の社会的スキルの獲得や問題行動の発現を予測したことを考慮すると、保育者が子どものひとり動的行動の多さに気づくことによって、彼らの行動や抱えている問題に早期に対応できるようになることが期待される。

### まとめと今後の課題

本研究では、幼稚園の年少児において、彼らが入園 (Time 1) してから約半年 (Time 2) での非社会的遊びの変化、また入園直後とその半年後の非社会的遊びと、同時期および卒園直前 (Time 3) における社会的スキル・問題行動との関連について、男女ごとに明らかになった。

沈黙行動について、全体における頻度は Time 1 から Time 2 にかけて減少した。この行動は、男女共に主張スキルの低さと関連が見られた。その一方で、いずれも問題行動との関連は見られず、男児において約半年後の主張スキルの低さが予測されただけであった。よって、自分から積極的に仲間入りができない子どもに見られる行動であるが、問題行動との関連もないので、長期的には心配する必要のない行動であると考えられた。

ひとり静的行動は、Time 2 において、女児の協調スキルの低さ、不注意・多動の高さと関連が見られた。彼らは、仲間関係が安定した時期、仲間と協調して同じ遊びをすることができず、1人でお絵かきや製作、周囲の探索をして遊んでいることが推察された。また、男児で Time 2 にこの行動を見せた者は、卒園直前に主張スキルが低い傾向にあった。1人でおとなしく製作などに没頭している場合であっても、そのままにしておくと、十分な主張スキルが獲得されないまま卒園を迎える可能性が示唆された。

ひとり動的行動について、男児は Time 1 のそれが、その後の主張スキルの低さを予測し、女児は Time 2

のそれが、卒園直前時における外在化した問題行動を予測した。男女共に、行動が見られた時点では問題行動との関連も見られなかったことから、教師が彼らのひとり動的行動に気づき、早期の介入をする必要性が示唆された。また男児よりも女児において、この行動が後の問題行動につながるということが推測された。

時期についてみると、入園直後は、仲間関係も安定しないことから、主張スキルを持たず積極的に仲間に入って行けないことが孤立と関係しやすいと考えられる。仲間関係も形成され、集団遊びも増えてきた10～11月の頃には、男児では主張スキルの低さ、女児では主張スキルあるいは協調スキルの低さが、孤立と関係していることが明らかになった。

性差については、男児は女児と比べてひとり動的行動が多い傾向にあった。また、非社会的遊びと社会的スキルとの相関の結果から、男児にとっては積極的に適切な方法で仲間へ働きかけるスキルが、女児はそれに加え周囲と協調するスキルが、それぞれの仲間関係で特に必要とされる可能性が示唆された。ただし、男児では、非社会的遊びは主張スキルとの間にしか有意な関連が見られなかったとも言える。相良 (2005) は、男児の仲間関係が、活動や興味の対象が似ている者同士で集まるのに対し、女児は内面的で密接な関係を作ることを指摘している。このことから男児の孤立に関しては、子どもの社会的能力以上に、子ども自身の仲間や遊びに対する興味・関心なども要因として関わっていることも考えられ、今後検討が必要である。

以上、本研究の知見から、非社会的遊びの多い子どもを捉えようとする際、時期と性差を考慮する必要があることが示唆された。集団内で1人で遊んでいるすべての子どもに社会的スキルが不足し、問題行動が見られるわけではない。また、そのとき社会的スキルが低くても、その後の集団生活の中で獲得される機会もあるだろう。ただし、その一方で、ある時期に、ある特定の非社会的遊びを多く見せる子どもは、その後の集団生活でもスキルが獲得されにくく、問題行動が目立つようになる可能性のあることも明らかになった。

ただし、本研究では、非社会的遊びの観察を年少児の2回しか行っておらず、それから卒園までの約1年半の間に、子どもたちに周囲とどのような相互作用があり、どのような行動の変容が見られたのかは不明である。よって、縦断的により短い間隔で非社会的遊びの多い子どもを追うことで、今回の知見を確認していく必要があるだろう。

また、本研究において、遊び観察尺度 (POS) を用い

た行動評定に関する構成概念妥当性の検討は行っていない。本研究の結果からは、海外の先行研究とは異なる知見も得られており、妥当性の検討はやはり必要であると考ええる。本研究では時間や協力園の都合といった制約により不可能であったものの、さらに長時間の観察結果との照合や、Coplan & Rubin (1998) の教師評定用尺度 (Preschool Play Behavior Scale)<sup>5</sup>との関連の検討から、妥当性の検討を行っていく必要がある。

### 引用文献

- Asendorpf, J. B. (1990). Development of inhibition during childhood : Evidence for situational specificity and a two-factor model. *Developmental Psychology*, **26**, 720-730.
- Coplan, R. J. (2000). Assessing nonsocial play in early childhood : Conceptual and methodological approaches. In K. Gitlin-Weiner, A. Sandgrund, & C. Schaefer (Eds.), *Play diagnosis and assessment* (2<sup>nd</sup> ed.) (pp. 563-598). New York : Wiley.
- Coplan, R. J., Gavinski-Molina, M., Lagacé-Séguin, D. G., & Wichmann, C. (2001). When girls versus boys play alone : Nonsocial play and adjustment in kindergarten. *Developmental Psychology*, **37**, 464-474.
- Coplan, R. J., Prakash, K., O'Neil, K., & Armer, M. (2004). Do you "want" to play ? Distinguishing between conflicted shyness and social disinterest in early childhood. *Developmental Psychology*, **40**, 244-258.
- Coplan, R. J., & Rubin, K. H. (1998). Exploring and assessing non-social play in the preschool : The development and validation of the Preschool Play Behavior Scale. *Social Development*, **7**, 72-91.
- Coplan, R. J., Rubin, K. H., Fox, N. A., Calkins, S. D., & Stewart, S. L. (1994). Being alone, and acting alone : Distinguishing among reticence and passive and active solitude in young children. *Child Development*, **65**, 129-137.
- Fabes, R. A., Hanish, L. D., Martin, C. L., & Eisenberg, N. (2002). Young children's negative emotionality and social isolation : A latent growth curve analysis. *Merrill-Palmer Quarterly*, **48**, 284-307.
- Golombok, S., & Fivush, R. (1994). *Gender development*. New York : Cambridge University Press. (ゴロンボク, S.・フィバッシュ, R. 小林芳郎・瀧野揚三 (訳) (1997). ジェンダーの発達心理学 田研出版)
- Gottman, J. M. (1977). Toward definition of social isolation in children. *Child Development*, **48**, 513-517.
- Henderson, H. A., Marshall, P. J., Fox, N. A., & Rubin, K. H. (2004). Psychophysiological and behavioral evidence for varying forms and functions of nonsocial behavior in preschoolers. *Child Development*, **75**, 251-263.
- 謝 文慧 (1999). 新入幼稚園児の友だち関係の形成 発達心理学研究, **10**, 199-208. (Hsieh, W. (1999). The friendship formation process in children's transition to preschool. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **10**, 199-208.)
- 金山元春・磯部美良・佐藤正二・佐藤容子 (2002). 幼児用社会的スキル尺度の開発の試み 日本行動療法学会第28回大会発表論文集, 180-181.
- 柏木恵子 (1997). 行動と感情の自己制御機能の発達—育児文化との関連で— 柏木恵子・北山忍・東 洋 (編) 文化心理学—理論と実証— 東京大学出版会 (Kashiwagi, K., Kitayama, S., & Azuma, H. (Eds.) (1997). *Cultural psychology : Theory and evidence*. Tokyo : University of Tokyo Press.)
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- Munden, A., & Arcelus, J. (1999). *The ADHD handbook : A guide for parents and professionals on attention deficit/hyperactivity disorder*. London, UK : Jessica Kingsley Publishers Ltd. (マンデン, A.・アーセラス, J. 市川宏伸・佐藤泰三 (訳) (2000). ADHD 注意欠陥・多動性障害—親と専門家のためのガイドブック— 第2版 東京書籍)
- 中台佐喜子・金山元春・前田健一 (2002). 幼児の仲間集団における人気度と社会的スキル—同性仲間と異性仲間からの評価— 広島大学心理学研究,

<sup>5</sup> 沈黙行動, ひとり静的行動, ひとり動的行動, 社会的遊び, 荒っぽい遊びの合計5つの下位尺度からなり, POSを用いて構成概念妥当性が確認されている。

- 2, 151-157. (Nakadai, S., Kanayama, M., & Maeda, K. (2002). Popularity and social skills in preschool's peer group : Comparison between same-sex and opposite-sex peer nominations. *Hiroshima Psychological Research*, 2, 151-157.)
- Rubin, K. H. (1982). Nonsocial play in preschoolers : Necessarily evil ? *Child Development*, 53, 651-657.
- Rubin, K. H. (1989). *The Play Observation Scale (POS)*. Waterloo, Ontario : University of Waterloo.
- Rubin, K. H., & Asendorpf, J. B. (1993). Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood : Conceptual and definitional issues. In K. H. Rubin & J. B. Asendorpf (Eds.), *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood* (pp. 3-17). Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Rubin, K. H., Hymel, S., & Mills, R. S. L. (1989). Sociability and social withdrawal in childhood : Stability and outcomes. *Journal of Personality*, 57, 237-255.
- 相良順子 (2005). 幼児・児童期における性差 教育と医学, 53, 433-440.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 (1993). 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練—コーチング法の適用とその維持効果— 宮崎大学教育学部紀要 教育科学, 75, 13-26. (Sato, S., Sato, Y., & Takayama, I. (1993). Social skills training with socially withdrawn kindergarten children : Application of coaching method and its maintenance effect. *Memoirs of the Faculty of Education, Miyazaki University, Education*, 75, 13-26.)
- 司馬理英子 (1997). のび太・ジャイアン症候群—いじめっ子, いじめられっ子は同じ心の病が原因だった— 主婦の友社
- 庄司一子 (1991). 社会的スキルの尺度の検討：信頼性・妥当性について 教育相談研究, 29, 18-25. (Shoji, S. (1991). Development of social skills-rating scale : It's reliability and validity. *Bulletin of Counseling and School Psychology*, 29, 18-25.)
- Spinrad, T. L., Eisenberg, N., Harris, E., Hanish, L., Fabes, R. A., Kupanoff, K., Ringwald, S., & Holmes, J. (2004). The relation of children's everyday nonsocial peer play behavior to their emotionality, regulation, and social functioning. *Developmental Psychology*, 40, 67-80.
- 吉村 斉 (2001). 幼児期における社会的行動とクラス内地位の関係とその性差 高知学園短期大学紀要, 32, 21-30. (Yoshimura, H. (2001). Sex differences of the relationships between children's social behaviors and sociometric status in their classrooms in early childhood. *Bulletin of Kochi Gakuen Junior College*, 32, 21-30.)

## 謝 辞

本論文は、筑波大学大学院人間総合科学研究科に提出した修士論文(2004年度)の一部を再分析し、加筆・修正したものです。本論文作成にあたり、筑波大学人間総合科学研究科の服部環先生に貴重なご助言を頂きました。また、本研究の実施にあたり、快く協力して下さいました幼稚園の先生方、園児のみなさんに、心より感謝申し上げます。

(2005.11.11 受稿, '08.5.8 受理)

## *Nonsocial Play, Social Skills, and Problem Behavior in Kindergarten Children : A Longitudinal Study*

AKIKO OH-UCHI AND SHIGEO SAKURAI (INSTITUTE OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCE, UNIVERSITY OF TSUKUBA)

*JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2008, 56, 376—388

The present study examined changes in nonsocial play (reticent behavior, solitary-passive behavior, and solitary-active behavior) and the relations between nonsocial play and social skills and problem behavior for boys ( $N=50$ ) and girls ( $N=35$ ) in 2-year-course kindergartens. Children's nonsocial play was observed immediately upon their entering kindergarten (Time 1) and 6 months later (Time 2). Their social skills and problem behavior were rated by their teachers at Time 1, Time 2, and just before graduation (Time 3). The results revealed that the rate of reticent behavior decreased from Time 1 to Time 2. Reticent behavior was negatively related to assertive skills in both the boys and the girls. Solitary-passive behavior at Time 2 was related to low cooperative skills and high carelessness/hyperactivity for the girls, and predicted low assertive skills at Time 3 for the boys. There were no significant relationships to solitary-active behavior at the same point in time. However, one of them at Time 1 predicted subsequent low assertive skills for the boys, and one at Time 2 predicted externalizing problem behavior at Time 3 for the girls.

Key Words : nonsocial play, social skills, problem behavior, kindergarten children